

# 論文内容要約

論文題目 判例から検討した歯科領域の医事紛争

責任講座：歯科口腔・形成外科学講座  
氏 名： 小林 武仁

【背景と目的】医療訴訟を系統的に調査・分析している報告は限られている。本研究の目的は、歯科医療訴訟の現状を臨床的な側面と法律的な側面の双方から詳細に分析することである。

【方法】判例データベース『ウエストロー・ジャパン®』に掲載されている判例より、1978年から2012年までの34年間に於ける歯科領域に関係した民事訴訟判決114例を対象とした。これらの判例を医療類型と法的論点類型からなる論点表（重複あり）に判例数を述べ件数として抽出し検討した。さらに裁判結果、処置別（観血的、非観血的）に損害賠償額を比較した。

【結果】医療類型では、診断に関するものが47件、治療に関するものが218件であった。治療の内訳は、麻酔・口腔外科80件、歯科補綴処置52件、歯科保存処置45件、歯科インプラント17件などであった。法的論点類型では、過失が206件、因果関係が31件、権利侵害が21件などであった。過失206件中多かったのは説明義務93件、次いで医療水準の86件であった。

論点表では、治療に関する過失を問われたものが最も多く171件で、全体の約2/3を占めていた。さらに過失の中で最も多かった治療類型は、歯科補綴処置に関する説明義務で29件、次に麻酔・口腔外科の説明義務27件、麻酔・口腔外科の医療水準26件の順であった。裁判結果は、全判例114例のうち棄却65件（57%）一部認容47件（41%）全部認容2件（2%）であった。損害賠償額を処置別に比較すると非観血的処置では平均約160万円で、50万円以上100万円以下が最も多く、多くは500万円以下であった。観血的処置は、平均約937万円で、100万円以上500万円以下が最も多く、1000万円以上の高額も7件認められた。

【まとめ】 歯科医療訴訟で争われた内容は、口腔外科手術を中心とした観血的処置の際に生じた生命予後に影響を及ぼす重大な障害と、審美的要素が大きく患者の QOL を向上させる非観血的処置の際に生じた身体的影響が比較的少ない障害に大別でき、それぞれの処置で法的論点が異なっていた。すなわち、観血的処置における説明義務では、治療法だけではなく予後や後遺症に関するリスクに対する説明が求められるとともに、医療水準では治療技術・知識のみならず全身的偶発症への適切な対応も要求されていた。一方、審美的側面の強い歯科補綴処置や歯列矯正治療の際には、通常の説明に加え個々の患者の状態に応じた具体的な説明が特に求められていた。損害賠償金額は身体的影響の大きさとほぼ対応し、判例ごとに大きな開きが認められた。

【結論】 今後、新たな医療技術の向上による医療水準の高度化、説明範囲の拡大により多くの要件が歯科医師に課せられ、従来以上に技術の研鑽や知識の獲得が必要であると示唆された。